おかめ来

三

曽 5
4
34
4

部門 24 號 4 卷

むらまさの書

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

五十師系 山邑佐井

萬葉集に見ふる伊勢、五十師、系山邑、佐井ハ、[illegible]

家、[illegible]て、今も山邑（ヤマベ）村といふ所も、[illegible]人の屋敷

跡といひ伝へたる地あり。又同じ人の祝ぎうえて。古き井もあり。
こゝも山邑伝説にいひ伝へたるは。中昔より
ありて。山路(ヤマベ)にふる蛙と。山邑(キノベ)にふる蛙とまがひて。赤人の蛙をも。山邑
とぞいふなる。此地の名ふつきていひなせるゆゑにこそ。さるはうち赤人
を。学ぶ人のめでたく名ぐれる人なるゆゑにこそ。五十師原を。美
衆の今はやふいそしめたるゝ所(ヨミ)なるべし。古はいそしといふ。五十
とあるを。略なるべし。いしはたらとよむべし。五十と半濁をば。
伊と通ずる。古書の例なるべし。いしのたらそは。石多云なり。ふるく。
洞ゆゑにこそ。ふるの人もいふべけれど。そのみ七なりしは。白況云とぞ
ふいふる例おほき中ふ。地名なるゆゑにはふるるまゝふ。同じふ

と云なりふもよあるべし。佛のはるすしまそいしの系といふ名のよう
な。今石業師。躍ふ石業師とて寺有て。石の佛をまつるゆゑハ
地の上りおのづからふ立る。大きなる石乃おりてふ。業師といふ佛の
かたちなるをつけるゆゑて。此石ひやしれるしこゝふよりて。ふるう
佛をゆりうるハほうしは伝のゆゑなるゆゑて。後のゆゑて。ゆゑを
上つ代より。けあやしきを石のゆゑしふよりてぞ。いしは系とハ名ふ
負ゆりゆゑ。今もそのいうゆゑ。むろくかの山邑村のきはまで。同じ
地乃つゞきなるゆゑし。かくて。業紫系十三の巻なるかの書ふ。持
統天皇の。此宮行幸ありしをりの。行宮(カリミヤ)はさゝ波をよみありく
なりしゆゑバ。赤人乃。宮跡といふる地ぞ。その行宮の跡なる

べき。おのれ此地のあり所。としごろ猶いぶかしかりければ。いにし寛
政元年三月。尾張の名児屋に物しける時に。道よりて考へし
に。まづ山里村。今はやまべといひて。鎌倉郡にて。河曲郡の堺に
石薬師驛より。六七町も行かんか。里の北にゆきて。東の方
あり。その里は。まぐが野といひて。西の方は。能褒野へつゞきて。い
と広き野也。此山里村は。其野の東のはづれの。小高く
里なるきはの。むきし所なる故に。東の方より見れば。小山の麓
なりけれバ。かの高き野は又高くに。おのづからなれる坂を境なる山
のごとくよめるか。西の方よりは。さらに平なる地のつゞきなれども。東より見
ればさる所によりて。山とはいへるなりけり。坂をさかるとは。かの行幸ハ云

年此三月なれバ。桜。桃などの花をいへるか。又大宝二年十月に
も同じ天皇。参河国に幸ありけれバ。此時にても行るむか。近し
参らバ河また参河への道の川なれて。坂ハ紅葉なるべし
とにかくにも。この歌ハ。女房の。これも家づとへの道をよめりと聞ゆ。河
行幸ハ必ず持統天皇なるべし。さて此あたり。今はなべて松山にて。河
曲郡の本ハかくして。かの国分寺といふハ。山里村より南の方へいさゝ
かのぼりて。高き所に在て。さても。塔も中門にはふりぬがどのさ
まりて。今は畠也。此西北の方に。石垣といふ所もあるを。此
ふる十年がほりされしに。里人の堀みしかバ。文此ほどの土の中より。蓋い
しのふるく物の。ちひさき石の仏像ののりいでたるを。をりくほ

ゐ出ることあり。といふ。さてその所のうらより伊勢の海よりくゐこぎさ
きて。こゝよりえきびまでふ水門（ミナト）なりとよめるさゐし。尾張冬の御の
山をもいせの山を海をとよりくゐて。宮川といふ川。村の東を流れてま
ぢかくゐあつさるなぐ。ちぐてかの名あれりきふよりかるゐる所し。
伊井はそこより南の方にて西の方へくぐりる谷ひの田の中ふ。
りてあり。百しゃく近きてゐを掘りてはいせて。あはあうまで。什一と
せ二せさんにまでハ井はりくハ始もうしといふをえきびハ今ハ井乃ら
しくぐふのくくびに苦田ふ掘りてしくぐいくうる所ふ古き松一ものくしそ
ゐのを掘るを此松の本さん伊井の跡なるといふ。その近き里ふハ
十八ふ掘りといふ。翁のいるゞかくりきるハ什松おのゞとかくゐし

不どふ年老くるものくむりくふも今も田どくふてかりくびをいび
しをそのてゐも今を又いくくりかをゐるを掘くるくもぬるくも掘
らぬどくゐ田どくしくぐ徳ゐ出る今ゐるふさくを大き掘る所ふ
もいりくびよりしき強ゐてまくふゐくハゐくりゐ今ゐより後り
此松さくハ枯うせくくむるハさびりゐ此所のなぐりどふ掘くきえハ
てちんをいくくもくむりくいれくきゐるぐ掘るバいくでゐぬをゐ
どをくくて跡をぐふ書き出までのくさ掘りくきるぐ掘りかし。
まて又りは赤人ゐなくいふ所よりて東北の方へくぐる所ふも古く
くゐる井ゐ山を村の東南のをづるの所し。こゝよりつるの井乃
さゐふゐをつみえぐして。ゐもゐ什ふいくきえでりふもれを

と里人いへりとぞ。くだんの御井ハ此二つのうちいづれならん。さだ
めがたし。赤人の歌なりといひつたへたるハ、はじめにいへる方しるし
百三四十年ばかりもさきに、或人の此国の事どもしるせる勢陽雑
記といふ物にハ、かの赤人の歌の事をいひて、その麓に清水有。
赤人の歌此所也といひ伝へたりとあるハ、後のうらにいへるやうなり
やうなり。後のかたハかの麓といふべき所なれど、みちのくさハやゝさかり
てかの麓とハいふまじき所なれバ、されどこハよしもなかり
ゆきゑて見るせるかなたの里人のかたれるを聞て、大かたにいへるか知
らがたけれバ、猶たづねしるべし。五十師ゑ山辺ハうるはし
なく此辺なるべし。赤人の歌の地ぞ行宮の旧跡なるべし。又旧井

とかの二つのうちハ定むべからずぞおもはるゝ。然るを師の万葉考に
も、なほ五十師ハ五十鈴を誤りて、かの古宮所、大神宮のあたりづ
たへの事に説(トキ)なして、鈴鹿郡の山辺といふを彼なりとて、くさぐさ
論じらはされたれど、其説おぼつかなくいはれぬことなり。そのよしを
いはんに、まづ一ツにハ、すべて師家の鈴の字をハ、皆古ハさらに
もいはず、万葉にも形似たれバ誤るべき事にあらず。二ツにハ、かの五十
鈴になりてむにハ、さて鈴の名もなく、ただ古き挿頭のあ
ふればおきても、山のべならむ所しも、山のべのとしもせるよしもなき
ことなるべきにあらずぞ。一の事なる所にハ山のべの御井を見がてり。其
をいふなれバ、山のべとかなるぞ地名なるを、五十鈴の川上にハ古より也

さる地名にてなかし。さべてうけ神主の行ることかゆるき所ハ。
もつぱらぬどふ。そのそろそろ好ふくい。どもそすぐふんハ法ロて。
かしこけ書ぞとふんてぞるハ好きを。こるこハさばりゆゆく。ゆるきさと
ろるふんぞるべきやうれし。三ッよハかの考ゆり。大法神の主づ
ろへのるぞよあるなるバ。名ろぞその大法神乃結ニ(ニヅ)ゆ。ゆ
ねどをこそいふ。ぞきふ。その大法神乃ハ。一ろいちぐして。ふ
ちかり大主ぞのへといふべきよりなり。始ゆる日の市ふ法食(ミケ)
つぶといひそ。大主づろへといるハ。天皇ゆ主物ゆる。銀ひちく。ち
ろへ法のんろすといふゆで。行ふゆる足法しるきき法を
ていつるさる。いちぞそ。ぞよハ。奇用新主ゆ主づろへ好ふちと

なるバいつきゆみとふ。ふゆ。ふゆ。ちゆるゆく。ゆゆる何
ゆるべきふ。さるて一ろゆ物ゆくて。ゆゆちく。大主ぞろといふべき
あゆは。ふぞ。天皇に仕を法女ろゆ物るる。法きゆるや。ぶ
ちゆ。ちゆきゆ大主人とハ。天皇ふ仕をる人ろろゆ。ゆゆれ。ゆゆひち
ハ大内ゆ主ゆ一人ゆをぞゆゆも。今欲主ふ仕を足ゆ人をう
ちゆゆて。ゆいろんてハいぞ。ぞゆハ。ゆ。ゆ欲主ゆ大法神ふつう
へゆふゆる法ゆある主物ゆ。ゆゆハ。及主ふ法井ゆるゆのをよゆるハ。
行のゆ。ぞや。セッまハ。ゆゆ神祭知ゆる山。色ゆゆる法。信説ゆて
て。やぶゆも。ゆるもゆゆ。ゆゆ。信説ゆハ。赤人の跡ゆふてゆ。赤人
のゆハ。ふきゆふ地名ゆ。附(イヒヨセ)ゆる知ゆれバ。ゆ説ゆて

信説なり。そもそを号捨（ステ）てむふ何の信なるてらけんそもく
きらの人のるをいひよせるも。ゆゆしき山をといふ和。又たき信あ
のあるかなをバそをもかてりて。たき姉なる説とそをべなを。みら
の山を村り。いうへ倭姫命より云をしといふも。信しして。その
よう況綿ぎ〳〵れるもの〳〵ぞ。倭姫命の云はるハ今聖人の
いひつをなられど。り〳〵まる説のいふバそをそを行云ふよ〳〵
あを。持統天皇も女帝にまし〳〵ほをバ。その切云況。倭姫命より
宮と。信を信へ〳〵とせバそををみうりて。かの切云はる説をべし。
八ッ日ハ。持統天皇より伊勢より幸ハ。書紀を考ふ。云年三月六
日辛未。京をいでませ。ひて。同月廿日乙酉。ふりてせ給り。紀

ふを。式行幸ハ五月。しといられるも誤。そハ紀。同年五月乙丑
朔庚午。御（ミ）阿胡（アゴノ）行宮時（ニ）進贄（リレ）者（ヲモノ）云〳〵。ふるを。誤て。ふ
紫は裏書。五月云〳〵引ふを。ふ〳〵て。五月とハ。ひ誤〳〵き
るしらの紀の文を。三月の切幸の時。阿胡行宮ゆて。贄をして
まつりし者況。五月。賞をしるをもるせるしかの紀を。ひ〳〵
きえてもるべし。ゆふハ。ふ紫一の中。ふ。山のべ乃ハ井をえがてりて
の方ハ。長田王。伊勢は所ふへ。おややをるゆてりて。れるつひで
ふ。ふる況所をもバ。此は井をもえふ立ようれるし。をもバられ
も。後。那ハ。次ふ。ひ〳〵ぞ。をしして。妨す。大は神の云乃
中ゆ〳〵。むふハは井をえがて〳〵。ゆきむて。いりぐ。ぞ。ふ。

なからゝ祢の地をはかる事

地（ツチ）の垠り、あらか祢のといふは、殿舎（アラカ）根のよし、いにしへ殿舎を
みあらかといひしは、つそこをはじめといはで、しるしたゞかゝのゆゑもい
へりして、古語拾遺に、云々造（リテ）殿（ヲ）齋部（ノ）所（ヲ）居（ル）、謂（フ）之（ヲ）麁香（アラカト）、
細注に、古語（ニ）正殿（ヲ）謂（フ）之（ヲ）麁香（アラカト）、とあるにてしるべし、さてかの
殿舎は、伊勢の大御神の宮などのごとく、すべて柱を地にほりいれてた
てつくりしかば、地をはらかの掃するよしなり、
ことはとかいふ物のこゝろ
いまもさるさまのかまへにて、つきかためて、埋火を敷きて、家よりみけ
家月、今の世にもつくといふ物をよめる、人のいひつたへしが、

むかしぬきなどやうの下ざまのわざにいたるまでのべて
あしくしけしも、いよゝさかゆれば、みな人ならひてやまぬ。

かの国にて孔丘が名をいむ事
ちかごろは、今の清の代に、その王が、孔子の諱（イミナ）を避（サケ）て、
丘（ノ）字は画を省（ハブ）きてかくことをはじめて、秦漢より明にいたる
までも、夫子をたふとむことは、こよなかりしかど、いみじくふる
からぼられども、名をいむことはなかりしを、ゐでこにて孔丘をたふ
とむとならば、ことさら尊くよく行ふべきことなり、そのさとをだ
に、くさてなすにしては、いつも人のことをよくまなばんは、
あふのいふしれるたかゞむ、よろづよく行ひたらばいふべくよわ

いむてをくて有まつる。そりゝハ今さゝいゝゝゝ。なそふと
とゝ行つむ。これゝゝ道をしふとゝがゝして。ゝゝ人ふいみしく
ゝハをむしゝゝのをかりてゝゝ。ゝゝ人のゝゝゝハゝゝいふ
ゝゝよりかくのごゝにて。聖賢といふ物をしるふゝむをいみ
きるゝふをゝるハ。みるまゝゝふゝむゝハゝゝゝ。ゝをむさゝるゝゝゝ。

片衣小袴といふ物

二水記云。大永七年正月七日。早旦室町殿出仕。令見物。道永以下悉以片衣小袴也。當時先無為之間。不可然之躰也。云々。武田出仕之躰同之。と行。片衣小袴といふ。此外ゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ。今ゝゝ乃肩衣

半袴のゝゝゝゝゝ。

肖栢みまかるゝ

同記云。同年四月四日。夢菴肖栢法師近年号牡丹花死去云々。八十有餘

揚弓といふ物

同記云。享禄三年二月三日午時。參内。有御揚弓。と
ゝゝゝゝ。禁中にゝかゝ係ゝゝゝゝゝゝゝゝ。

立花業の湯

同記云。大永五年三月六日。午後參青蓮院門跡。少納言令同道。今日花御會也。池坊六角堂修行也花之上手也祗

候十瓶餘有之〻〻同六年七月廿二日午時参青
蓮院方里小路阿野少將高倉少納言等同道於池
中嶋有御茶種〻儀右有興當時數奇宗珠祗候下
京地下入道也數奇之上手也

後柏原天皇崩御御入棺の儀

同記云太永六年四月十一日天晴戌刻有御入棺
事御棺從雲龍院沙汰也先之有御沐浴儀云〻為僧衆沙汰之間不奉見
範久朝臣取御服御直衣御袴御袷御念珠御血脉等各居御茵一度授之御冠御枕
自本副寺授長老泉涌寺長老取奉入御棺欽如此儀
玉躰
一圓為僧衆行事之間不見之項之事調之由示之

仍催御膳之事頭辨資定朝臣参進供御膳先之桶以緒置
案二脚於御前菅少納言長淳衣冠役送五前次
備御膳料也
第一第二御飯第三第四第五菓子供了即撤之此後供御
手水棉手洗御手揮等資定朝臣先取御手洗置御
以緒持参授長淳等
前北面也先例以西南為御前欽然而此記録所御
座分只一間也為狹少之間為北面立御屏風
次取棉兼撤入水二三度其
蓋許也次取御手拭懸御手洗
端則撤之長淳取之授以緒云〻

〻四界四角祭

西宮記云四界祭陰陽寮向四界祭以藏人所人為
使四角祭陰陽寮宮城四角祭有使所人以上天下

有疫之時、陰陽寮進支度、料物官宣

船岡紫野御霊會

日本紀畧云、正暦五年六月廿七日丁未、為疫神修御霊會、木工寮修理職造神輿二基、安置北野船岡山、屈僧令行仁王經之講説、城中之人招伶人奏音樂、都人士女齎持幣帛、不知幾千萬人、礼了送難波海、此非朝議、起自巷説、また長保三年五月九日、於紫野祭疫神、号御霊會、依天下疾疫也、是日以前、神殿三宇瑞垣等、木工寮修理職所造也、又御輿内匠寮造之、京中上下多以集會、此社号之今宮といふ。

朝野群載に、天養二年閏四月八日、散位中原師光勘文に、正暦五年六月廿七日、被安置疫神於船岡上、長保三年五月九日、被安置疫神於紫野、京師衆庶行御霊會、件年々天下不静、仍有此儀とみえたり。

大神宮御参宮

何ゑ抱り、寛永二年、伊勢の太神宮に、おかげまゐりとて、あまたの人、老をおびてまうづる者有し。その人の数をつぎつぎしるやう、四月上旬より京并五畿内の人、ぬけ参宮といふ事有り、四月上旬よりはじまりて、ちかごろ八日に二千三千ある、十三日より十六日まで、十万人にこえたり、十七

日ごろ漸々減じて、又廿四五日ハ、三四万人と、それより大坂へ
うつりて、廿六七日にハ、五六万人づゝ、廿八九日ハ十二三万人づゝ、五月朔
日よりハ、七八万人づゝ、三日ごろ十二三万人づゝ、八日ごろよりいよいよ
熾(サカリ)にして十六日にハ二十三万人に及びしが、これぞ後の最上にして、そのゝち
漸々減じて同月末ハ一万人ばかりなりしが、元宝四月九日より五
月廿九日まで、凡五十日なる、すべて三百六十二万人としるせり、文
同じ頃に享保三年春のほどまでゞ人の数をとりしるしけるや
う、正月元日より四月十五日迄で、京の人凡て四十二万七千五
百人としるせり、これハよの常ならぬことなれど、

齊明紀なる童謡

書紀の齊明巻、六年なる謠(ワザウタ)、或人の考へおきたるによりてお
のれ又考へけるやう、はじめよみ句をのへだ波句かなぐくれもぬ句、
はじめよみ句をのへだをらふ句かなりくのちらふ句ぬりくづまの句つく
かりし句おなへど波句かなどりけるふ結かくはぢめしなるべきう。
そもそも此歌ハ中々にきざけるを人なる歌に学ぶにをかりても、おもきさ
らに句は其後をとも文字は次序をも、かきみだして付けるとよ
みとれがたきものにしてよみ伝へまぬとしれど、そこハかくぞに甲子とし
ふきるハ、これよりよみ始むべきなり、文そとハに思ひて文字の次序を
もおきかへてよむべきなり、例のごとくしるしもし、これによりて
おのれハ今此甲子と云下よりよみはじむ、第一の句、騰和(トワ)騰與(ヨ)美(ミ)

ハ本にあり。騰與を與騰と書かへたり。又騰和を多和とも。古
事記に。山之多和とかける是也。かくて多和と騰和と通ふよしハ。さき
むねとさむしるして。汲さとくなど見りいつるし。万葉にあまりされど。騰
和ハ。山のたをみたる形をいふ。騰與美ハ響動也。第二の句。鳥能陛陀
鳥ハ。尾上田をふて。山の尾なりその田也。第三の句。歌理騰理能俱
邏賦ハ。雁く飛食ふふて。雁くとハ。山く川く出く人くなどいふ例まておふ
くの雁どもの群れたる山の多和よりむすでもしかなきまでて。田
の稲をもみ食ふ也。第四の句。騰和騰與美上なるに同じ。此句本にハ。
美和陀騰能理歌美とかけるを。美字陀字能理歌の字ハみなあ。
お後にかける字にてみだりてまぎれるし。又みだしえの騰と與とあ

くるなし。第五の句。上なるに同じ。第七の句。比邏矩豆摩
能ハ。かの或人の考に。平偪僂の意なり。郎此意に偪僂といふ
人の名まて。此云俱豆磨とみえたるを。平とハいかにもせなるまね
きりていふ。むきにまひかる松を平松といふさびしといへり。第八の
句。都俱利伺を佃するし。本に俱例豆例とかける。豆ハその写字
上なる都と入かふべし。上の例ハ利。下の例ハ伺の誤りなるべし。まさに八都俱
例くにても怎なれまらいつ見にても有べし。第九の句。於社
幣陀乎ハ。押塞田なし。おさへを筑紫の意なり。筑紫國
波。安多麻毛流。於佐倍乃城曾等なとかける。於佐倍
と同くて。仇を押塞ぐよしなし。此意謡ハ。百姓の出を救ハせ給

に佐軍の敗をぬべきことありしかバその救の佐軍をさして於社
幣といひ田ハ尾上田にたとへたるなりそれをつゞけていひてさゝへ
と実ことを合せたるにかく一句の中に実の上への詞とさゝへたる拖乃
上への句をかはすまでつゞけていへる例万葉に多し其十の句上
なるに同じかくて一首の意ハかの武人の老に救の佐軍の敗をこて
多くの功労のむなしくなるをと手傴僂乃事ゆきがたき身を
りてなしみて辛うしてつくれる山の田を多くの雁どもの来てそこ
そこなひてつひにむなしくなれるにたとへたるといへるがめし但しかの老の
うちにこもりかとも誤まるなれど有りまづしらずまのといふを其
一の句とせるよろし神の句ハ六言なるハたゞの言に例なきことな

之その上へこより三句ハ必ず続にいふべきなりき）次に於社幣
陀を弘能幣陀の誤りとしてたもとを見て紀中に字を書るやう
一首の内にて同じ詞の二つ三つあるをバ同じ仮字を用ひたる例に
て此なる尾上田をも二所なぐし鳥能陛陀と書るかにさ仮字
をかへて弘字幣字をかくむして其その例にあるがごとく次に美和
陀騰能理歌美とあるを美歌理能陀和美騰と書て
佐狩のしかむろに居る来ることくもまる美歌理能美和陀
騰ととして其のみならずよどむめく佐狩に出るはなをいふから
いへる二つともふるし佐狩のなきこるなりとみゆるもみるぞ
るといふべきに行くにて次に甲子の下なる騰和與騰美を和

騰與騰美（トヨドミ）こと。また和騰ゝ與美（ワトヨミ）ことよみて。朕（ワレ）を
よばし。朕とよまむなど解る。さらに叶はぬことし。さてまた羽
倉ノ東麻呂大人は。文字をおきかへてよめる事。むかしより。本
の沙汰はすべかよみて。解（トカ）もよる説あれど。皆思ひ出て。を
べて詞との。そば。をさとりても叶がたし。さ説を秘説（ヒメコト）とあ
もばらしるは。歌しがたし。そもそもいふ上ッ代の言といへども。
あるもくまでなしぬ詞もまじりされ。いづれは言も並べてそよ
く叶れても。むげにきこえぬなり。一首もなき哉。此字ふうかりても
ずふ叶れぬなり。そうど名ふいへるごく。句は前後文字の深ちをご
とさくにつきみずるもるあふて。かの野馬臺の詩とうつふ我

のめくめる出ざまなる所。そうぶ心を住まする人のなきはいかに
ぞや。但しおのが今はうむかへも。からじまよしとふはかりぞ。
独（ヒトリ）乃句は言と言とみなせし。様よき考へも有なきまや。
かく人のおやのおもひに弟子をやつまる
目にこしは哉乃よりは抽しむ人ぎもは。親乃喪（オモヒ）に。身乃いみし
くやつれしる所。孝心ふかきすふしても。さ志しるが。なかとあ
依申ふせ。またぶ心のかねしさは。いとさぶらうもかつぐるものも
を。食物をいとく忌らしあどとて。痩（ヤセ）さらぼひて。病とさくふ
かからうもち所やつしても。いみしぎふうちをへをえきくるがあま
うりぎふえやらは。例のいとくく係されるぎなるといふうきさる

にほんじやうも文をこゝろせずして。親を捨てるに学問ふかくとも。
おのが身をも。はぢかしやつすべき事には。身をやつすに。病なりとも。お
ろそかにしたからば。なくわかるゝともなむ。身は。孝行なる子
といふべしやも。るゐひさまで申をいふべしとも。おもひみし
くやつしよしなむをば。若き下にも。おやをさしてそしらるゝ
しくも学はせんいふてかしこしとはいへども。さる親の心をば思はでしりぞ
学は人のものとはしらひて。名をむさぼるは。何のよれなる
らむ。すべて孝行も行はざる。学ふものやはきゆるまじきをして。
よみしきるに学ぶるは。かれ人のならひなりぞ行はれざる。
○富貴は禄をむさぼるよりきたるにはある縁ひ

世の儒者。身はまづしく賤きをうれへず。富み栄えを願がは
ず。よろこびけるは。よくするにもあれども。是は人のまことの情(こゝろ)
ならば。おほくは名をむさぼる。徳乃ゆゑなし。何もくにさ
ふむなるものゝことゝ。其学者がものにては行ひ。わがの
よはすなるん。さとるをなさぬ。あるまじきをしして。かながちに願
がひもては。行しからるをも。ほどなくには。むべきことをいへし
くつとめて。なかのがれが富(とミ)さかえむてぞ。父母よりも先祖よりも。
孝行ならぬ。身おとろへなるへずしからむぞ。うへなき不孝に
なる者かれ。よくおのがいさぎよれ名をむさぼる行ありにま
ことは孝をなすとも。又ゆゑこうし人のためならわかし。

雲しみ

源氏物語のをとめより老ふ或初つかの比笑ける詞いつかとて
ふはうしみのるしいつをを河海抄ふ比笑ける詞辛満しるを笑
ものあふいつふ侯きれて侯乃ほどとふもらをふりわて
辛(トシ)満しとあるをどもおしてつて乃ゑがをしふ侯ふいつふ精(シヤウ)
進(ジンオチ)歳ちるしおちくぼのの抱侯ふ山まで付るをいつる布ふうつ
給いむふはうしみをぞ志給いんとそ情略の日記ふるふこ
ろるぬるがかてゝるの時のるの詞いへる布ふいふぞやうしみをお
そし給ひてそうゝ又神祇伯のるつふもはを爺にうをりてを
をを給どいふそれど爺るれとやうじをゝ又ほどちふまで

ゝるかつるさのるをいつる布ふ字治のてうゝうしみのまうけ有
るを鮎ばうゝゝそてそのの下ち河ふ沙魚(ハヤ)をおろりるる又鯉鮒(コイフナ)
ちがいつるをそうゝ拾まうでふて精進ありし侯
爺て魚をうひをむるをいへるを時きゝ笑ける詞をうて安
ゆべしやをまを法笑ういへる時ゝをふ是ゝ笑ふふのうちはよ
うひを祈るをて佛事をりふゝ有てうれをちのをくめち
者の法の文りも経佛法事ち月乃ゝぞゝろゝどもうゝゝ
ける是しその佛ふふ精をしゝうしみの儀或ちて言ふを
を考ふふ魚食物ふを忌(イミ)ふ侯爺ふよふふておうゝいみゝい
ふをふ侯ゑゝる物るべし精進をおつゝいふ河古佐日記りゆる

ぎゝせられしも。さらに拙なかりしかバ。千の時より後に。からぢよりぬき
の御陵をたづねしに。銅(ヌヒ)に鐵なりければ。是をたづねしかバ。おほくらまで
えらびしまで。みのうつし屋に考へしかバ。ちやうど契沖も。精きの後。
魚ろびろまるまで。おしあはくいひしき。

神武天皇の御陵

神武天皇乃御陵を。今ミサヽギと申す所ハ。何ともなき所にて。実ハ
今綏靖天皇の御陵と申すぞ。神武天皇の御陵ならむと。おのれ一考
へたるぞやく。吉野の里の日記に志るし志たるを。其後。此頃五年さ
きに大和の人に。竹口英斎といふがかきあらはしたるハ。今綏靖天皇の
御陵と申すハ。あたり綏靖天皇ならべく。神武天皇乃御をおのれさ

ざるに帰りまゐりて。日本紀に志るされたるに方もよくかなへり。そも
畝火山乃東北の方の麓につきて。天皇宮といふ祠(ホコラ)のある山こそ
に宮(アガタ)を加志(カシ)といふ所あり。古事記に志るされたるかしの尾上てふ
名のこりたるなるべし。山本村なる神八井耳命の御墓山よりハ東。小
泉堂(セダウ)村よりハ南。大久保村よりハ西にて。保良村といふ里のあたりに
それ近きあたりの田地(タドコロ)の字に。神武田(ジブデン)またみさんざいなどいふ所
もあなりといひて。すべて此うちびにのこれる御陵どもも。其のあたり
をいとよく考へて出せる図をも見たりき。同じ里乃内に
て。さぶらひしを尋ねしかバ。志むしりえて。考へさざるもと
ぞかゝれる。されど深き見しかバ。おのが法き乃かむかへを。猶あらう

ぞ。まことふ此人のいつる和ぞ。其形ゝ変と思ひて。さまざま形ふ綾靖
天皇より伊予ハ多くぞ今いふまことゝ思ふを。今ゝ
まことやはらぎ。いづもより帝ゝ
ゆも。さて此英秋といふ人を。さべきは学ゝ此天皇より伊陵を始
名なりて。皇后皇子皇女ゝ多ちなどの此墓まで。廣ゝ考へゝ。陵
墓志といふ物をかゝハ。まことゝ
くわしハ。おのもまことつ
ゝゝうかゝ。必なしをへらとよく。かへまくまを
ハいふ形ゆゝも。そのゝちハとゝびたなん。
とかゝといふ何

童蒙抄ふ。山城、摂、和といふゝろを。經信つ。山城ハよどゝまえつ
つ際ふゝ。とかゝぞうゝ此ゝ乃を好るハ。ゝ。いづゝぞといふべき
を。とゝゝぞゝよゝゝいぞゝとゝ。今此ゝ乃言ふ。いづゝを。どこゝ
いひ。いづゝをどれ。いづゝ又いづゝを。どゝとゝふゝ。けゝかゝゝ
ふやゝゝも。

ゝゝ堀

大和、山人のいゝゝ。城上郡ゝ山村ふ興堀（コヅミガ）といふゝ。人ハ圓ふて。
内ゝるゝ。ゝ（イハ）ゝ。ゝゝゝゝて。ゝゝゝ。そのゝゝゝゝ。人のゝゝこ
ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。

まゞ大和国又八塔ゝ多くしゝ塚いづこにも多くれバいうゝ
しゝ石つゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

名・苦爻のほどハ・ひゝしゝ・ふ生て・よゝしゝ・ちぐ名・ちゝ・いゝ・くゝ
へ・ひ・のひ・ひ・ぐ・ち・ち・ひ・笑て・ひ・ふ・入内雀（ニフナイスズメ）といふ名・実方・中将のふる
事・ふ・い・て・中・苦・ち・書・ふ・ひ・ち・ゝ・ち・ち・ぐ・ち・れ・ハ・附食（ヒキヨセゴト）・ち・て・ふ・ふ・ひ・ち・ハ・
新嘗（ニヒナヘ）・ゝ・ふ・ち・ひ・ぐ・ち・ぐ・ち・新稲（ニヒシネ）・を・ゝ・ち・ち・ふ・キ・ち・ち・ち

神の道を説くを学ぶ

神道典を説くもの、ハ紀傳道の儒者の職なりて、その学を弘
書、弘仁より代々に、日本紀私記などいづれも、漢学の
餘力をもて考へるのみにして、神典をもとゝ学びるゆえ
よりてこれが証ふ古の言語ども、もべてうしなへる
ふて、ものちよりも道の肯綮といふなるさまを説きて、ふべ
文ふるとて、ひるべきよくふいつるばかり、絶えぬ奥旨のむねの
儒者ども、もべてくかゝ由のやうふ己が説ふそるんハなかりしな
ふ、神の古ぬをそくそくても、漢をふきまげるを、説も
きく、ふてを、傷をふよりも強説なかくて、やちゝに、その

ぬ、後学ふいとうて、ハおふ神学のといふ一なる道出来て、もハ
らふきるもがゝしいうをバつぎ〳〵ふくもなりて、ゆゑに
始べての学の始を学人の心、形をさかしくかりて、神の古ふをかく
者もさかしらをはきふ、文のまゝ始きで、おのが始む
きぐふ月つきて、ひるハ仏を、ひるハ儒をふきまぐるこゝろあれ
ぬ、ましいよ〳〵ふひるりてゆくまに、近き学なりて
ぬ、又やうゝふ、ふ仏をまぐふが、ぬぐなるてをさ
ふりて、そもをバおちぐ〳〵のぞきてちゝ〳〵ふりて、絶ぬぐり
そをハまゝふ古ぬを説さうて始るふハうゝびゝぐ、儒をこの
めるかゝいをへるものゝ、ひるをふ、近き学ふ、神のをゝて説紀を、

えさせ給ふ。儒ふしてさそふ神のまふをば。このうちにがくのの
佛の法をしらるゝ。はじめ給ふ。ちくぜんのくにはうなづき。みづからも儒ふ
なかばにて。えさせ給ふ。ざるハいふぞやがくしてもちくぜんの
ちからの儒ふ。ちからをもやいとうして。はじめ給ふ。
こゝをのぞかしこゝにもる者ハ。これをしるべきほの色くれなゐ。
そもそもといまゞ法くの儒ふをもをもくして。天理陰陽
あくいふ説をバ。かゝまくいんぜ。そもそもれを例乃さかしら乃
立いでくハる天永ハ帝位の。てくし。天照大神を。天つ日り
つぐべき海神(ワタツミノ)をを。一つの時心と。まるとゞひをべてうやくふおのが
まくらはじをとりて。まゞくふ説曲(トキグ)ふ。えまぬるとしぐるゝ。

なかみを儒ふとなる。みづからもとゞくしぐるハまる癖(クセ)の世乃
人のこゝろの底ふ。をみたきしるかしひぞかし。

選子内親王はじめ給ふ事

選子内親王。ゝ。ときえる時ふ。面ふむしてよみ
めぐる。思へども。いむこそいとぬ。ものバそあふむきて。ゆをの
みぞなく。河尼素ふへまり。をべて伊勢。ゝ歳の歌(ウタノミコ)をふて。
いくゝ佛を忌て。をのをぢはとこ。何ふいふをぐふいゝめり
まるゝ。をさぐをわき。ゆるふ陽。人をむりまる。ゝ。ゝ。
賤きもかゝくきも。ゝるもおくしをべて。佛の道を。ぎぬ人ハふ一
人もなくわれバいつきふぬ。ふをバ。ふきるふとて。歌き給へる。

らひすわき。さま。で。祈ふたてまつりたふたひのまえやふかいせん
みハ。その忌蠟（イミキヲ）ひあふきもぢをバかきてもおがみまるべきなりなど。
西ふ向ひて。祈ふかきたふぞかりかいしいもむるかきまがこふぞ
者りの系。さそハたうちもたうぎう。宣祈（スメカミ）のいつきふてハおりまして。
ハたのもりたう。極楽の阿弥陀の欲（イツキ）よりてもおりまれるふてもハ
ゑの肉ふてそハおのづからさおぶをてもたうん者もおかやきの者
きいやしめ者ハ。ふなぞふよみ歌りたふべきふたうびゑ又とそひよ
みぬ。ものもの。必ず人ゑ仏ゑ。ぎハ。たふまづきるぞ者をハたもぢ
ものもおがまるぞや者りむ。されどひみをのもたとがよしもあしび。
いまとかしこて。祈をバまれをりて。ものぶふ。佛の者をとふ

ものとおとふをのもいみしきるふハをて。かゑ体をぢをかりてふふ
かりうをもふるぞふをべて。人もいひ号ふ。中ハをるひまりしうを
ぞかりしもとも。此ゑんみをきよふ大欲院（イツキ）にて。多融天宮の
ハたう。天延ていひ。極よりわ。後一條のみぶうハ。長元といふこうまで。
五ハたう（イツミヨ）ふもうりて。ハよりひ七ナふちうまで。欲（イツキ）ふおりはしれバ。さバ
おりうの仏者のよまで。佛のもおこをひのふてかるハぬをふうくかる
しくおぶりもむる。さる者のたるひまそハたとまうぞかり。されバさバ
ものと仲子ふたゑよせて。西ふむひて者をひしひみこしとたのや
しくもたるひうふたうう。ふたうう。ふたうりしるハ。大祈のたゑふと。云
中の者をひふおぶりゆるもて。たうれるおぶりそてふやたうりむ。

又そもそもまがりの神の例の所やしろにやまうで

伊勢例幣使發遣參向路次事

西宮記云、伊勢使、當日早旦沐浴、次修禊云々、次參内、懸生絹袋於頸、依召參御前、近龍顔、給宸筆宣命、近代加懸紙、使捧笏給之、捧懷中、勅曰能久申進一枚、被封、使称唯、次被仰曰、宣命讀了、於神前可燒之、若不被仰礼、使出殿上、令藏人申下可燒、次將可返上、次由、云々、次到甲賀驛宿、云々、十日云々、到鈴鹿驛宿、十一日、國司供給、早旦浴殿、次禊、就路、渡鈴鹿川、一渡安濃川、到壹志驛宿、十二日云云、伊勢祇羕於下見橋退去、渡櫛田川、大神宮撿非違使可祇羕、多氣川、禊、大神宮司儲祓物、下樋小川、或云停鈴声、神領與國領之界也、件川在齋宮東、云々、下見橋、下樋小川、別所、多氣川、西、齋宮、東、多氣川の東なれども、齋宮は東ふ東なれども、齋宮八、多氣川の東なれども、

諸社遷宮

同記云、諸社遷宮、事、伊勢宮、廿年一度云々、宇佐宮、廿年、太宰府勤之、住吉、廿年、使神祇副云々、云々、鹿嶋香取、廿年一度、

宣命料紙の色

同記云宣命料紙伊勢緑賀茂紅餘黄

新任國司廳宣神事を先〻とする事

朝野群載云初任國司廳宣新司宣加賀國在廳官人雜任等仰下三箇條一可早進上神寶勘文右件神寶或於京儲之或於國調之者且進上勘文且可致其勤又恒例神事慥守式日殊可勤行矣一云〻一云〻延喜十年月日〻廳宣但馬國在廳官人等仰下雜事一可勤仕恒例神事右國中之政神事為先專致如在之嚴奠須期部内之豊穣云〻年月日いふ〳〵諸國ゆてゝ神事を重〻せられ〻のみし

福来病

日本紀畧云天德三年云〻今年人民頸腫世号福来病とゝ〳〵頸のぬらゝなるゝがゝいひなせしわゝ

ゝべ〳〵長元二年九月十月ごろふる又世病ふるとき

ふもまけるぞ

同書に應和二年八月廿日殿上侍臣設和歌負態去五月庚申夜男女房献和歌男方負仍所為也

天德四年内裡焼亡事

同記云天德四年九月廿三日庚申今夜亥三剋内裡焼亡火出宣陽門内方北腋陣不出中隔外天皇

先御中院次御朝所頃之御職曹司定行之寮警固使累代珍宝多以焼失云々丑剋火止廿四日云々又昨夜鏡二和名加之古止古呂并大刀契不能取出今日依勅令捜求餘燼之上已得其実但調度焼損其真猶存形質不変甚為神異即大蔵省韓櫃令奉納之十月三日縫殿大允藤文紀参申去月廿四日依宣旨御坐内裡賢所三所遷奉縫殿寮之間内記奉納威所三所一所鏡件鏡雖在猛火上而不涌損即云伊勢御神云二所真形无破損長六寸許一所鏡已涌乱破損紀伊國御神云々大刀廿八柄之

中四柄自清涼殿求出之廿四柄自温明殿求出之其中有節刀契七十四枚皆魚形也自背中別兩各有銘併全不損長各二寸余許八枚金十四枚銀五十枚銀塗物又有金銀涌乱一斗餘許也左近少将源伊渉将監藤原佐理右近少将藤原助信将監源時中蔵人主殿助藤原為光出納雀部有方女官寺同以祗候云々云々十一月四日天皇自職曹司遷御冷泉院應和元年十一月廿日天皇自冷泉院遷御新造内裏云々

放生會音樂事

同記ニ天延二年八月十五日放生會宜仰雅樂寮准諸節會音樂官人率唐高麗樂人舞人等從今年永供彼會者又仰云宜仰左右馬寮十列御馬各十疋從今年隔年令供奉彼會者云々

同記ニ天慶五年六月二十一日癸酉奉東遊走馬十列於祇園依東西賊乱御賽也

集和歌所ニ

あり[illegible]ハ祭ノ日ハ[illegible]車ニ[illegible]

を見てよそうといふ十列ハ[illegible]

[illegible]

[illegible]

主の[illegible]に漢人も舟をうかべてゐそぶ云今日ぞとげせこ[illegible]

きよ新古今集ハ十九ハ三月三日家持

てハあや人とハ例べ[illegible]

[illegible]

此吾子乎韓國辺遣と[illegible]

呂宿祢を餞せるなり韓國ハ

[illegible]唐國を韓國と出るハ共ハ[illegible]

[illegible]

朝臣といふ字は事
かゝ孫の朝臣は阿曾美(アソミ)なれて吾兄臣(アセオミ)といふこゝし。始るを天武
天皇の御宇に八色のかばねを定め給へる時より朝臣とは書(キ)始めゝ
き。そは代字の。ひらがなとは訓を借て。始めしるねるゞ。字義を
と思ひてのゝ為べし。漢籍(カラブミ)にも。蔡邕が獨断に。公卿侍中
尚書衣帛(ヲテブ)而朝(スルヲ)曰朝臣(ト)諸營校尉将大夫以下(モ)亦為
朝臣(ト)と云ふこゝ。かの由は書に考ふ事なり。

んの花ふ

地獄ぶをあどぶ。刃にあやまちの行るゝ。人はまるとらねども。
おのゞんゝおそゝを。心の鬼(ニ)といふ。かゝぶを列子注ふ。疑心

生(ス)闇鬼(ラ)といふ。ちをいふ。こゝは。ぐへゝ。ゆゝるこゝし。

太宰帥大貳の任ふ。ふりむゝ。ゆのゝ

西宮記ふ。太宰帥大貳赴(ク)任事。蔵人奏聞(ス)。依(テ)仰(ス)召(ス)御
前(ニ)。自(リ)青璅門(ウノボル)参上。給(ヒ)被酒(ラ)。給(フ)御衣一襲(ジ)。諸卿参上。勸
盃。諸卿座西面。孫庇南三間。帥貳座北面。菅円座。給(フ)禄(ヲ)。後(ニ)下(テ)拜舞(ス)。出
自(ニ)仙華門(ヲ)。或(ハ)別(ニ)召(テ)之(ヲ)有(ニ)勅語(ヲ)。

太宰帥の帥字はよみ

帥字ふハ二の考ありて。まをかゝれ。帥(キウナリ)某と。ゑきうはゆゝ。
所律及ふて。あり。その考し。将帥主帥元帥ゑゞ。その主と
ゝる人をゝふ。きハ所類及ふて。ものゝ考し。さて太宰帥ハ。ゆ乃

府の長官なるべきことなるべし。古より所律文の方の考ばに用ひて、それ〳〵唱へ来つるハいとなほふる古へゝ誤るべきふハいとゝなほあるべし。

妹字の事

鎮火祭祝詞に伊邪那美命乃伊言に伊邪那岐命を吾奈妹乃命と。また吾名妹乃命と。又その上の文に妹背二柱と。背字も書紀釋元〻集などに引るに妹とあるハ古きなほ有〻なるべし。また和名抄備中國賀夜郡の名に庭妹と。また尓比世と。また世に庭潦と。今世に庭潦といふ所なし。妹字も妹を誤るなり。又同宇下道郡呉妹下野国芳賀郡に廣妹遠妹などいふ名ありこれハ讀をもてなぐ他ぢいふなりとなり。妹字なほいとゝもあるべしてせと假字にもつかふ。また又紙中國下毛郡に弟翳と。また勢とも。也名もあるに准ずれぐこれなほ妹と。また世せるもの古へ男女の兄弟ありけるなほ。男をハ弟と。また勢と。例なるハ。の弟字ハ。また〻なほ貢とせバいとれとも妹と。また世せとよむべきなり。ハさなほ。なれど皆妹字に假借なるなり。

又保辛盛衰記に辛夷の侍に妹尾太郎といふ者。また同じ。妹字ハ先なほ。みなかく妹に假借なるし。又同盛衰記に平時

忠てはうしないつる事ふ石達春つ尾のれ妹（シセウト）うそ　おそ〜まし〜いうバ
そこうまふハ　せそ〜そふ妹字を　ま〜そ　そ〜そ　世字ハ妹（イモ）ふむ〜へそ。
夫兄（せせ）のそふ　宣國少ていそ〜人造そる字そ　そしそう　そそる　ゑ　ゑ　ほ
うにる　夫〜字　書　孝　ふ　字　漢　ふ　そ　ど　夫　兄　ゑ　ど　ち
義（コロ）そ　ふ　て　ち　そ　字　ゑ　そ。

みちの〜にそ　ゑ　ふ　ふ　ゑ　ゑ　ゆ　そ　ふ　ゑ　ふ

宗人は作が都のたそ〜いふ物ふいそ〜。みちはゑ佐島の沼を
ちぐそ〜。世ゑふ　ゑ　ゆ　そ　れ　ち　あ　そ　ふ　や　と。年月ふそん　ふ　ゑ　ど　そ
〜ゑバこの歌人ゑ〜ゑ　ど　ひ　に。物ゑ　そ　ゑ　ゆ　や　そ　の　ゆ　き　ゑ　ハ　あ　そ
ち　ど　ま　れ　ど　ま　ゑ　の　中　ゆ　の　ゑ　ち　ぐ　そ　ち　ゆ　ひ　ま　ふ　ゑ　ゆ　や　め　ち　ふ

らなそ　ゑ　が　ち　ゆ　ふ　ハ　ふ　そ　で　都　の　ゑ　ど　ゑ　ゆ　や　ゆ　ひ　ふ　く　べ　き　そ　て　ゑ　ゑ　ゆ
つ　そ　ふ　ふ　せ　そ　れ　ち　そ　ま　そ　ま　そ　ま

えてうた。細流抄小さかしくさしてうたうとしたる世うたう。今の世うも。美濃国の言にさうでは〻〻〻

或人の説に岩口村と松田村とあひぐ東岩口村とそれて
そそゝ東に終止の處〳〵にひて小き塚あり。こゝを下極小川の
源といふ。今八川を流れて北塚の下にて小川
ぞ。やゝ東の方に出て。高盛川と云て。古橋を流る川なり。
此川の上。今より大さ少八。飯高郡の内にて。下村と上川村との
境なる小川。又德和村と下村との境なる小川。また今の
大道。松阪の東なる。德和村の東はづれに。貧乏川といふ有て。
古橋を流る。その西の上の方に。此貧乏川の底の地の下を。西
より東へ流れ。ときどきに樋を通して流る。一つなる。そは高川の
上の方。地元きゝして。かの貧乏川へ一つに成しがゆへに。高

下極を流れて。東の地元きゝ方へ流れる。かくて此川も高
盛川乃上なる小川ども。の内の一つ。此下極。此下極。
よりも。此せゝらぎ。下極小川といふ名なり。八月頃に
て。おへるふるかゝるかやぶ。ぶかゆるかぶ。
つまゝや上りいへる細汲茅といふ草なり。伊勢勅使
部類記に。嘉兼二年二月十一日。伊勢奉幣使進發
云く。出壹志驛岸江南大神宮。撿非違使二人来依
為祇兼也。伊勢祇兼也。帰也。まゝ。長治二年八月十六日。伊勢
勅使進發云く。十八日。雖可急立待潮干之間。及已
終沐浴解除。依保曽久美南江潮疋駕暫蹈立神宝

奉留者待潮干之故也岸江南ニ仕兼撿非違使来向
伊勢仕兼帰去渡櫛田川之後暫休息云々
ヒ岸江南といふ即下極小川し岸江ハ今も松坂のきた
ゝ東西岸江東岸江にてゝ細汲ゝ細頸ゝも云ヒ松坂の
半里ばかり北の海きりて後ふ松が浦にて北畠信雄の君の城
を築れし所なり今の松坂ハその松が浦の城を引うつされし
美を壁とよそる言
後撰集恋一ふ詞ありきがあひ仕ふる城後ハまかりぞな
ヒ仕ふるとハ家かべの仕ふるとおもき城をつふえて
かゝる家後にまぎろまぬえ引人を見ぬるかなまさ

ゝ引ゝ物も寄ゝよの美金紫集雑上に男ゝ物ゝ引ゝ美ゝ
と人をはぐゝふいまゝゝ引ゝのをゝとまゝできゝひ
ゝ引ゝとゝ引ゝとゝでゝ引ゝゝゝ孫のゝ屋ゝゝとづゝゝ
ゝゝゝ

ぢぎ〜ぐと。きくてえもバ。ぐ日ど。ちれ落ちるやうふえて〜
を。えてまかりあ。て。つゆ〜けゑ。うつ〜ふもかだふも日ど。鶯
を見て。神てもさめてもそそ〜れぬるみ。迄〜。美の学ふかべよと
落る。滝乃糸。桜花がんう〜かきつ〜やさハ。爰をかだ〜〜よゑる
ゆ。ちもちれ。ふ。なあ身〜やうにおぐ。ゆ。え。ちいでぢ。
思ひ出〜ちむ。ち〜。又もかきいでぐ〜むう〜。
おう〜ゑ。ゆ〜ちわかる。書じぶ。学れ。ちきハ。ちれ日のくれぐされこ
こちれ。ち。ちもば。ま〜てと。こもハ秋の日ふて。のこれるうゆぢ
もハ。ふ〜れ。ちふぞ。